

渡船に仇あだした大蛇

なにせ音に聞こえた急流です。その昔、富士川を渡ることは誰もがおそろしく命がけでさえありました。

なぜかといえば、富士川の主に魅ま入いられたら生けにえにならない限り船はひっくり返されてしまうのです。

その日、水神の森にある渡船場から姫君の一行が船に乗り込みました。

あわ立つ水流。川の中ごろで渡し船はピタリと動かなくなっていました。船頭の顔色はまっ青です。「皆さん、自分の持物を何か一つ投げ入れて下さい。さあ早く！」



昭和五十七年五月五日号

船中の人々は、懐紙や扇子などを川の中に投げ入れました。何と沈んだのは姫の持物だ
だひとつ。

姫は徳川家康の娘の一人、三河の国竹谷の
城主へ嫁ぐ途中の旅でした。

このままでは、富士川の主に船をひつくり
返されてしまいます。

身をふるわせる姫とあわてふためく一同を
静めて、旗本平松金次郎は「皆の者、姫を無
事に頼んだぞ」と一言、姫が羽織っていた緋
の打ち掛けを自分がかぶり、太刀を片手に川
の中へさんぶと飛び込みました。

すると不思議、船は動いて、岩淵の岸へ無
事着くことができました。

やがて川面がまつ赤に染まりました。波し
ぶきと共に現れたのは、娘の身代りとなつた

豪勇の士平松金次郎と大蛇の死がいでした。
今まで渡船に仇してきた富士川の主はこの
大蛇だったのです。

それからというもの、渡船が止まるような
ことはありませんでした。

魚道のある最近の富士川

